Osaka University Knowledge Archive

Title	湖北省荊門市沙洋県厳倉楚墓獾子冢発掘概要
Author(s)	小沢, 賢二
Citation	中国研究集刊. 2010, 51, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61087
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『中国研究集刊』出号（総51号）　平成22年10月　1－8頁

湖北省荊門市沙洋県厳倉楚墓獾子冢発掘概要

小沢賢二

1．はじめに

厳倉古墓群は楚の古都である紀南城から東へ約8km離れた湖北省荊門市沙洋県後港鎮松林村二組（旧、厳倉二組：北緯30°23′11.7″，東経112°18′33.6″）にある。当該古墓群は「1982年第一次全国文物普査資料」によると、大小13基におよぶ。この中で獾子冢、窑冢、塌冢、鶴子冢の4基の古墳は戦国時代の楚墓と推定され、とくに主冢というべき獾子冢は、包山2号楚墓や棗陽九連墩楚墓に匹敵する大規模古墳であるとされる。

今回（2010年1月16日～22日までの7日間）発掘調査が行われたのが、上述の獾子冢である。調査の結果、獾子冢は湖北省文化庁によって厳倉古墓1号墓と名づけられたが、厳倉墓群考古隊は獾子冢（M1）と呼称し、また同考古隊の領隊（＝隊長）をつとめた宋有志は、報告書である「湖北荊門厳倉楚墓群M1発掘情況」（2010年1期『江漢考古』所収132-137頁）の中で厳倉楚墓群M1と称している。

本稿は便宜上、獾子冢の名称を用いる。今回の発掘によって、大量の有字竹簡および竹簽牌および魏国の年号を含む銘文が刻まれた銅戈等が発見され、中国史学界に大きな反響を呼んだ。本報告は、獾子冢に関する発掘の経緯と概要を述べるとともに、出土文物について若干のコメントを加えるものである。

2．発掘作業とその報道

2009年10月20日付の湖北省南水北調網（文責：湖北省文物局の楊愛華）によれば、南水北調（中国南部の水を北部に送る）プロジェクトにともなって、湖北省内にある古墓群の保護救援調査の必要性が高まり、これをうけて2009年10月13日に「南水北調引済漢工程厳倉墓群考古工作領導小組召開第一次会議」が開催された。

会議に先立って、湖北省文物局によって厳倉墓群考古工作領導小組が立ち上げられたが、この小組は、湖北省文物局局長兼湖北省文化庁副庁長である沈海寧が組長となり、湖北省文物局副巡視員の呉広堂、および湖北省南水北調工程領導小組弁公室副主任の王芳玉、ならびに荊門市人民政府副市長の柯昌軍が副組長となっている。

会議の席上、包山2号楚墓と棗陽九連墩楚墓に匹敵する規模の獾子冢が議題となった。湖北省考古学研究所の主導による事前調査（2010年6月～9月）によれば、考古担当者は当該冢にて直径1.6m～2.2mにおよぶ比較的新しい盗掘洞を発見したとされ、文化財保護の観点から緊急にこれを調査保護することで見解の一致を見た（筆者註：事前調査に関連して、以下の殉職記事が確認される。2009年7月28日付の荊門晩報によると、天門市博物館の考古学専任者であった胡平楽は獾子冢の事前調査を命じられて、7月25日午前8時半過ぎ当地に到着した。だが、公道上の電線に接触して感電し、沙洋県第二人民医院に搬送されたが，午後死亡が確認されたとする)。

湖北省文化庁は同月に国家文物局より獾子冢発掘作業開始の批准を得たが、この批准をうけて湖北省文物考古研究所は厳倉墓発掘等に関する具体的方策として、「考古発掘隊・発掘清理組・文物保管組・後勤保障組・保衛組・強調組・交通運輸組・宣伝組」の8組からなる合同チームを立ち上げることとなった。

具体的には、考古発掘隊とは新たに立ち上げられた湖北文物考古研究所の宋有志を領隊とする厳倉墓地考古隊を、保衛組（盗掘の抑止および警備を担当する）とは沙洋県公安局治安大隊の下に置かれた人民武力警察湖北総隊荊門支隊の隊員22名および民警の隊員12名を指す（筆者註：後日この保衛組の下に、一日につき40元の手当を支給されて警備にあたる紅色腕章を巻いた地元民などが組みこまれた)。

発掘の開始とともに、荊門電視台は2010年1月16日から25日までの10日間において獾子冢に関する特別番組を編成し、北京の中央電視台も現地に取材クルーを送り込み、1月16日から23日までの8日間にわたって獾子冢の発掘情況を特別報道として全国に配信した。

この中で、中央電視台は航空機を用いて2基の大形古墳とそれに伴う2本の車馬坑を空中から撮影した。この情景は壮観というべきものであったが、筆者が分析したところ、放映された映像は棗陽九連墩楚墓（2基の大形古墳）であって

獾子冢（1基の大形古墳）ではないことが判明した。

３．発掘経過

2010年3月6日付の厳倉古墓考古隊の公式発表を中心に諸情報をまとめると獾子冢の出土概要は以下の如くまとめられる。

総面積は6000㎡、坑口の表面面積は200㎡、坑口から坑底までの垂直深度は11.8m、15階層からなる階段を経て坑底に達する。開口は長さ33.2m、幅30.6m、深さ19.1m、墓道の長さは約23mである。

堆状の封土（盛り土）は高さ8m、封土の南面には長さ約41m、広さ5～6m、高さ3.5mの「封」が確認された。墓口から椁の蓋板まで15の階層（＝階段）がある。この階層は広さ0.3～0.5m、高さ0.6～0.7m、第8および第9階層に2つの環状の木片がある。これが当時における葬礼の痕跡なのか盗掘痕であるかは明らかでないが、考古隊は前者とみている。

墓口から椁室の蓋板までの深さは10.5m、15の階層（＝階段）がある。椁の蓋板は長さ6.4m、広さ5.5m、厚みが0.28～0.32mからなる15本の木材（材質未詳）によって造られている。

獾子冢内観（2010年1月16日　中央電視台BLOG「楚地楚人楚風情」より転載）

また、東面の坑壁は約60度の傾斜面となっているが、ここから坑底に達する。報道によれば、封土堆上に3個の盗洞がある。それぞれ口径が2.2m、1.8m、1.6mであるが、その中で最も浅いものが奥行5mであり、最も深い奥行きが19mであったという。もっとも、2010年1月17日付の楚天都市報や同月19日付の中国三楚伝媒網などの写真をみると、当該盗洞とは別に椁付近において2つの切り込みからなる盗洞と階段の2層から5層にかけて1箇所の人為的な汚れを認める。楚天都市報は前者を電動ノコギリによる2つの切り込みがなされた際に生じた木屑（オガクズ）が散乱したものとし、後者を盗掘者の侵入痕と述べている。

これらは2006年に盗掘の容疑で公安当局に拘束された容疑者自身が墓室には侵入しなかったとの供述と結びつけられているが、2010年1月17日付の北方網によると湖北省考古学研究所副研究員である黄文新は車馬坑の発掘業務が主担当であったが、盗洞の1つを現代のものとし他の2つを古代の盗洞（2010年1月25日付の中国三楚伝媒網では3つともに明末清初の盗洞）と述べている。しかし、なぜ2つの盗洞を古代の盗洞としたのかは不明である。椁室および棺については後述する。

4．出土文物等から推定される被葬者の身分

（1）２つの車馬坑から出土した戦車および指揮戦車

2010年1月16日、荊門電視台は厳倉古墓の発掘現場において湖北省博物館副館長兼湖北省文物考古研究所副所長である孟華平の発言を報道した。この中で孟華平は1号車馬坑で5車12匹馬、2号車馬坑で1車2匹馬が出土したことを述べるとともに、2号車馬坑の1車2匹馬は典型的な指揮戦車であると強調した。

ところが、これは車馬坑の発掘責任者である黄文新（湖北省文物考古研究所副研究員）からもたらされた情報を取り違えたものであって、実際には1号墓に近接する1号車馬坑からは5車12匹馬からなる戦車5乗、また2号車馬坑からは1車4匹馬からなる指揮戦車1乗が出土していた。

しかるに両坑は羅子冢の西方に位置し、南北に並列する。まず北側にある1号車馬坑は、上側（北郭）が押しつぶされて破壊され、車馬坑自体がいくぶんか傾斜している。坑口の残長は182m、広さ4.45mであり、この坑内に戦車5輌とこれに伴う12匹の馬が陪葬されている。1号坑内の戦車は5乗としたが、その内訳

は車1輌に2匹の馬とする型式が4乗（戦車4輌に8匹の馬）、車1輌に4匹の馬とする形式が1乗となっている。これに対して、2号車馬坑は規模が小さく坑口の長さ3m、広さ3.66mである。2号坑内の戦車は車1輌に4匹の馬とする型式の1乗のみである。当該1乗の外側には漆甲が施され、また内部には旗桿・銅戟・銅戈等が残存していることから典型的な指揮戦車と推定された。

（2）棺椁の内部構造および副葬品

棺椁の発掘については、文物保護の観点から湖北省博物館文物保護中心が担当し、文物保護中心研究員の李玲が指揮を執った。しかし、現場での情報は錯綜したようであり、1月23日付の中国中央電視台での会見では、棺椁の内部構造に関して考古隊の領隊である宋有志と副領隊である韓楚文との発言に食い違いが見られた。

すなわち、宋有志が「棺が二重棺の構造である」とする口頭発表を現地で行ない、「一層は方棺であり、更にこの中に二層があって弧棺が存在し、小数の銀片および玉珠ならびに1本の簪が副葬品として認められた」と述べたのに対して、韓楚文（湖北省考古研究所の紀南城工作站長）は、「1号墓の主棺は一椁三棺というべきものであって、内棺は破壊されて被葬者の尸骨はことごとく内棺と北側の墓室内に散乱している」ことを述べている。

筆者が入手した情報では、棺椁の構造に関してはどうやら韓楚文の発言のほうが正しいようであり、椁室の発掘は概ね以下のようにまとめられる。

椁室の内部は長さ5.56m、広さ4.59m、深さ1.75mとなっており、この中に東・南・西・北・中央の5室がある。そして、棺は椁室の中央部に位置するが、棺自体は三重構造となっている。外棺は方形で、長さ3.13m 広さ1.67m 高さ1.63m。中棺は弧形で、長さ2.71m 広さ1.14m 高さ1.16mとなっている。ただし、内棺は破損しているため、形状およびその寸法は不明である。この内棺に納められていた遺骸は破壊されて被葬者の遺骨は内棺の一部と北側の墓室内に散乱していたが、被葬者である男性の頭蓋骨および肢部等の骨を収容した。

椁内室における主な副葬品は南・西・中央室内にあった。最初に調査の手が入ったのは1月20日であり、南室から2本の竹簡が出土した後に銅鏃および竹笥銀鋤等二十余件が出土したとされるが、出土した竹簡には文字が記されていなかったようである。翌21日は西室が調査された、ここから銅矛、箭鏃、玉首削

刀、文字が記された大量の竹簡、竹笥等が出土した。そして最後に中室が開けられ、ここからは銀片や玉珠、角簪、文字が記された竹簽牌（未解読）等が出土している。

なお、棺上部の先端部に成年男子の朱色の足形がつけられているが、その理由については今後の課題となるだろう。

（3）出土の指揮戦車等からうかがわれる被葬者の身分

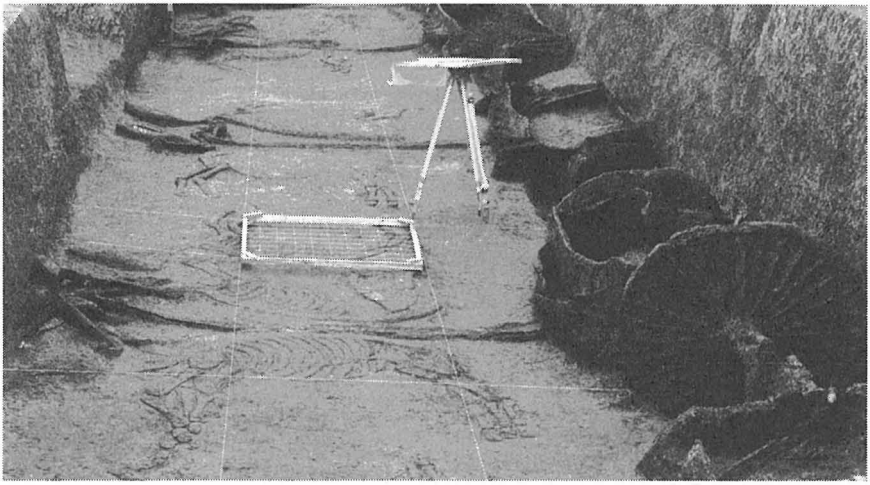
当該古墓は古くから春申君黄歇の墓と伝えられていた。2010年1月19日付の武漢晨報は荊門市文物局の鄭副局長に対して電話取材をおこない、被葬者が春申君黄歇であるか否かについてコメントを求めたが、鄭副局長は被葬者が春申君黄歇でないと回答したとする。その第一の理由は黄歇に葬儀に関する歴史記録がないこと、第二の理由として他にも10数個の伝春申君黄歇墓があるからだとしている。

また、厳倉墓地考古隊の領隊である宋有志も中国中央電視台の取材に対して、「墓の形制・規模・墓室・棺椁などの構造に鑑みると、被葬者の身分は大夫クラスであり、戦国時代における楚国の大将軍と想定されるが、被葬者の特定はできず、ただ軍事に関係する人物としかいいようがない」と答えるにとどまっている（1月23日付の中国中央電視台でのインタビュー）。

古代の礼制では「天子駕六、諸侯五、卿四、大夫参、士二、庶人一」というように身分によって駕車の区別があるため、被葬者の身分は大夫もしくは大夫以上と想定される。

『史記』「春申君列伝」によれば、春申君（前320～前238）は戦国時代の政治家かつ軍事家でもあった。姓は黄、名を歇といった。楚の考烈王元年（前262）に黄歇は楚国の宰相となり春申君に封じられ、魏国の信陵君、趙国の平原君、斉国の孟嘗君とともに戦国四公子と称せられた。もっとも『史記』では、春申君黄歇は政敵である李園が放った刺客によって暗殺され、そして春申君の切断された頭部は棘門の外に投げ捨てられ、春申君の一族は李園によって悉く滅ぼされたと記されている。

発掘関係者が被葬者を春申君に比定することに消極的であるのは、『史記』の記述からは春申君が大規模な墓地に葬られる機会などなかったと推断しているからなのだろう。



16日における1号車馬坑の情況(同日付の中央電視台BLOG「楚地楚人楚風情」より転載)

（4）銅戈銘文「二十六年晉國上庫工師虎治」

被葬年代の手がかりとなるのは、上述したところの2号坑から出土した1本の銅戈である。この戈頭部に3行からなる12字の銘文があるが、銘文は「二十六年／晉國上庫／工師虎治」（2010年3月6日付の厳倉古墓考古隊報告による）と判読できるという。各種報道では、これを魏恵王二十六年(前344年)に比定して、被葬年代に結びつけようとし、戦国中期偏晩と推定する。

筆者（小沢）が考えるに、戦国時代において魏国の恵王（梁恵王）は春秋の晋を承継するとの立場から自国を晋国と称している（『孟子』「梁惠王上」梁惠王曰：晉國，天下莫強焉，叟之所知也。）。このことから、「二十六年晉國上庫工師虎治」に見られる二十六年晉國によって魏恵二十六年とみなしたのであろう。

（5）竹簡および竹簽牌

竹簡は2010年1月20日に2本が出土し、翌21日になって大量の有字竹簡と少量の竹簽牌が出土した。大量の有字竹簡は総数1000本未満で、葬礼に関する卜辞祭祷類が記されているとのことだが、竹簽牌は未だ解読には至っていない。

（6）削刀

2010年1月21日付の楚天都市報などによれば、墓室中において2本の銅削刀が出土したとされる。そのうちの1本は全長約20cmであり、玉首と刀身部分との接合部分が金メッキによって装飾されている。この銅削刀の形状は曾侯乙墓出土の玉首削刀よりも明らかに刃部が彎曲している。

また、2010年1月21日付の長江商報によれば、削刀のほかは1本の長矛（三角形）、8本の銅鏃（三稜形）付きの銅箭（同じく三稜形）は、弓から戟などの楚国の特徴を備えた古代兵器も豊富に出土したとされる。

5．まとめ

湖北省荊門市沙洋県厳倉古墓1号墓から出土された有字竹簡および竹簽牌は、上博楚簡や清華簡のように盗掘後に香港に出回ったものではなく、その出所が明らかであることはきわめて重要である。また古墳自体が郭店楚墓に比べてその規模が大きく副葬品も身分が高いとの強い印象を与えている。

有字竹簡および竹簽牌にどのような文字が記載されているか注目されるとともに、2号車馬坑から出土した銅戈の銘文にある「二十六年晉國上庫工師虎治」について被葬者との関係も論ぜられよう(注1)。

注

（1）　「中新網」荊門発5月17日電によれば、5月17日に車馬坑から出土した車馬は同日付で荊門市博物館（館長龍永芳）に搬入されたようである。